中学校家庭科におけるディベートの授業の検討

榎本　優希*　・　鎌野　育代**

Yuki ENOMOTO・Ikuyo KAMANO

Examination of Debate Class in Junior High School Home Economics

要　旨

現在、アクティブ・ラーニングの視点から授業の改善が求められている。これを受けて中学生が主体的にディベートに取り組む学習方法の検討を重ねてきた。そこで、以下２点を研究の目的とする。

（１）中学生という発達段階に適したディベートの学習方法の検討プロセスを示す。

（２）消費者教育におけるクレジットカードをテーマとしたディベートの学習と一斉授業における記述内容を分析、比較する。

結果、準備段階で生徒同士の話し合い活動が活発化すること、生徒が、生活を自分事として捉え、ものごとを主体的に選択しようとする姿が見られるようになった。また、ディベートの効果としては、生徒は主体的に知識を習得し、自分の消費のあり方を客観視しながら、実生活につなぐための工夫を見出すことである。

【キーワード：ディベート，中学生，家庭科，消費者教育，クレジットカード】

１．問題の所在と研究の目的

2017年告示（小・中学校）の学習指導要領（2018）では、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、アクティブ・ラーニングの視点から授業の改善が求められている。これを受けて、荒井（2020）は家庭科の授業を「探求的で深い学び」とするためには、授業を生徒の立場から見直し、授業づくりの観点を教師主導から生徒の思考や経験の深まりに沿ったものに変えていく必要があるとして、教え込みからアクティブ・ラーニングへという学習方法の転換、よりダイナミックで繊細な授業デザインと展開が必要であるとしている。また、伊深（2018）も家庭科の学びを深めるためには、「教えるから学ぶ」へのパラダイム転換が必要であると述べている。

このような問題を解決するための学習方法として、生徒自らが主体的に知識を得るとともに、主体的に問題解決に取り組む学習方法として、ディベートがある。牧野（1996）は、即興ディベートによって期待される主な効果として、①論理的コミュニケーション技能の向上　②経験・知識・意見等を整理し、体系化する能力の向上　③問題を一面的・固定的にではなく、多面的で柔軟な観点から理解し、認識する能力の向上等をあげている。また、これまでにも家庭科において、ディベートの授業研究が行われ、その効果が示されてきた（香川，2001；長谷川，2007）。その中で分校・上野（2001）はオンラインディベートと教室ディベートを組み合わせた授業を展開し、結果、地域による意識が異なることが、ディベートによって、視点の多様化を生み、自己の意見を深めることができたことを報告している。但しこれらの研究知見は、対象の生徒の発達段階に適したディベートの学習方法の検討プロセスを示すことや、結果明らかとなったディベートの方法を用いた授業実践による効果を探求したものではない。

そこで、本研究では、一人一人の中学生がより主体的に取り組むことができるディベートをめざし、令和2年度から実践を重ねてきたディベートの検討プロセスを示すとともに、その学習方法を明らかにすることを目的の一つ目とする。

一方、中・高等学校の消費者教育の授業では、生徒に伝達するべき内容が多く、「教える」授業になりがちであるとされている。神山・堀内（2010）は消費者教育の実践の評価について、教師は授業後に感想などを書かせるのみではなく、生徒の実際の行動に近い真正な課題に取り組ませる必要性を述べている。そこで、これらの知見から、授業後の感想を、主体的な知識の獲得とともに、実生活につなぐ学習となっているか、つまり、「クレジットカードを作るか、作らないか、自分はどうするか」という視点から分析すること、加えてディベートを３年間で３度実施した生徒を対象に、ディベートに対する自己評価を行い、生徒のディベートへの意識を明らかにすることを目的の二つ目とする。

＊以下、研究の対象は中学生とし、生徒と表記する。

２．家庭科におけるディベートの授業

教え込みからアクティブ・ラーニングへという学習方法の転換に向けて、家庭科の授業づくりにおいては、さまざまな意見や考えの中から、よりよい結論を導き出す

*　千葉市立朝日ヶ丘中学校
**　島根大学教育学部小学校教育専攻

ためにバズセッション形態による話し合い活動を積極的に取り入れてきた。しかしこの形態は、ただグループになって知識をお互いに伝え聞き、メモをして終わってしまうことが多い。つまり、話し合い活動をしても、教師の意図する深い学びにつながっていない場合もあることが課題であった。

そこで、生徒一人一人が、生活を自分事として捉え、自分で考え、ものごとを主体的に選択できる力を育成することをねらいとした知識活用型の話し合いの学習活動をディベートとし、その具体的な学習方法について検討した。以下、ディベートの学習を確立するまでのプロセスを示す。

（1）第1段階

テーマに対して、クラスを賛成派と反対派に分け、バズセッションの形で以下のような流れで行った。

※A班…賛成派　・B班…反対派
①各班、それぞれの立場についてのメリットを考えて発表をする。
②もう一方の班の発表を聞いて、質問や否定をするようなことを考え、発表する。
③改めて、それぞれの立場で質問や否定に対して答えるような内容を考える。

結果、生徒の活動は、流れ②から活発になった。

課題は、知識を持っている生徒だけが発表することが多く、何人かは傍観者になってしまう傾向が見られたことである。これは、1つのグループの人数が多いことが要因として考えられた。また、班が順に発表をする形式は、ノートにメモをとることに時間を費やされ、思考する段階まで至らないこともあることも課題として残った。

（2）第2段階

バズセッションの形ではなく、学習形態を賛成派と反対派を向かい合わせになるようにしてディベートの雰囲気が出るような会場を作った。また、1つのグループの人数が多いため、発表をする生徒と傍観者になってしまう生徒が出てしまう課題については、ディベートを2回に分けて行うことで解決を目指した。賛成派を2班、反対派と2班作り、1つのグループの人数を半分にする。そこで、ディベートを行っていない班は、審判をすることにした。これらのことを踏まえて、以下のような流れで実践した。また、ディベートのルールとして、発表回数は、1人3回までとすること、作戦タイムは、1班1分とし、2回までとることができるとした。

結果、自分たちが調べたことやメリットをアピールすることで、前半・後半共に①の活動は自信をもって活動できるようになった。また、審判となる半分の生徒は、真剣に討議を聞き、メモをとったり自分たちならどのように対応をするかなどの話をしたりしていた。一方、生徒にとってこの形態で討論することは、普段の授業ではほとんど行われないことから、緊張する姿が見られたことが課題である。そのため、立論はできても反論や質問は準備していたほど意見が出なかった。また、できるだけ全員が参加できるように発表回数を制限したり役割分担をしたりしたが、即興で対応できるほどの情報整理ができておらず、深められないこともあった。

※A班、a班…賛成派　B班、b班…反対派
【前半グループ】
A班×B班（a班とb班は審判）
①各班、それぞれの立場についてのメリットを考えて発表をする。
②目安の時間だけ設定し、反論や質問などをお互い自由に討論できるようにする。
【後半グループ】
a班×b班（A班とB班は審判）
①各班、それぞれの立場についてのメリットを考えて発表をする。
②目安の時間だけ設定し、反論や質問などをお互い自由に討論できるようにする。
・ディベート中、教師はファシリテーターとなる。

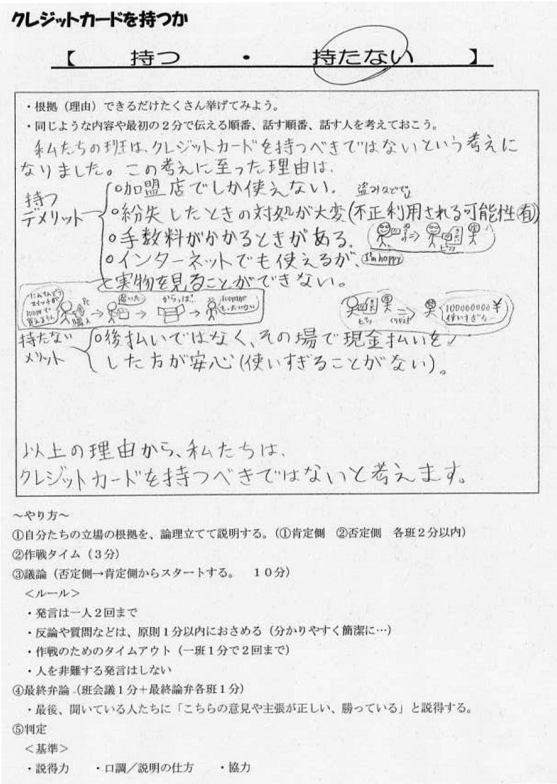
（3）第3段階

第2段階において、緊張によって討論が続かないことを課題としてあげた。その課題解決のために、作戦シートを筆者が独自に作成した（図1）。

この作戦シートには、各立場のメリットやデメリット、反対尋問ができるように事前調査で得られた資料やメモができる。そして、メモをする段階で、相手の議論を予想し自分の考えを客観視し、チームとしての意見をまとめることで、生徒がシミュレーションしながら多角的に検討することができる。また議論が可視化されることにより、グループの生徒同士が協力し合えること、より多くの生徒が発言することができるようになったことが挙げられる。そして、これまでの経験と参考文献等から、以下のような流れを作った。

①両者の立論
②作戦タイム
③反駁[1]
・各自の発表回数、作戦タイムの回数は事前に設定をして伝えておく。
④作戦タイム
⑤両者の最終弁論
⑥判定

両者が立論を述べたのち、事前の作戦シートを見直し、どのように質疑するのか、反論するのかなどを相談する作戦タイムの時間を作る。反駁[1]の際には、それぞれの立場ができるだけ平等に意見を言えるように、教員がファシリテーターとして時間配分を考えたり内容を簡略化して伝えたり確認したりするようにして進める。これらの結果、活発に意見交換ができるようになっていった。



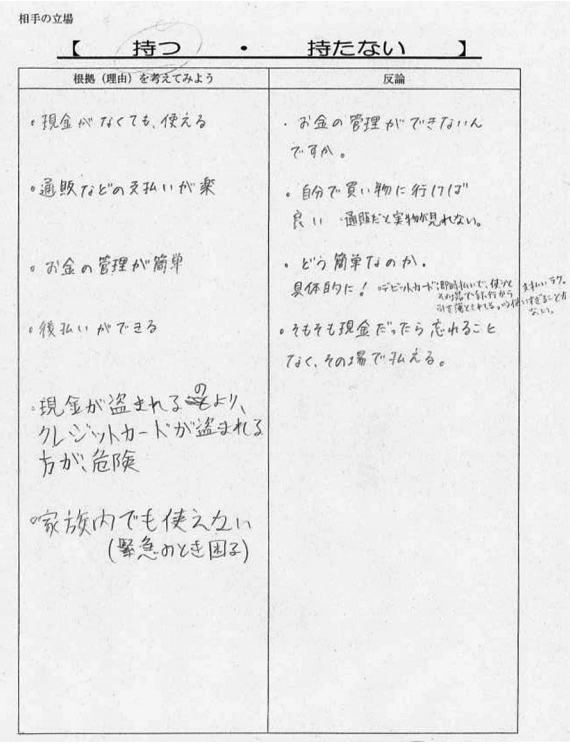


図１　作戦シート

（４）第４段階

第４段階では、フローシート（表１）を活用して、ディベートの内容をフィードバックする時間を確保した。本論でのフローシートとは、審判側になっている生徒が書記となりディベートの内容を記録するものである。手書きではなく、タブレットPCを活用することにより、文書作成ソフトを共有することができ、ディベート後、すぐに内容を再確認することができる。また、生徒はディベートのなかでは気づかなかったことへの気づきがあり、教師による補足説明にも役立つものである。

（５）ディベート学習の指導計画

以上のことを踏えて、ディベートに向けて準備からまとめまでの指導計画を作成した（表２）。

３．クレジットをテーマとしたディベート学習の授業効果の検討

（１）研究の方法

授業の実施時期は2022年５月～６月、対象生徒は公立中学校３年生３クラス（93人）である。

今回、ディベートの学習効果を検討する目的から、2022年４月に質問紙法で「お金に関する授業への興味・関心」について、４件法（４；ある　３；まあある　２；あまりない　１；ない）でアンケートを実施した（表３）。

表３　お金に関する授業への興味関心得点（平均値）

	人数	「お金に関する授業」への興味関心
Ａ組	25人	3.0
Ｂ組	28人	3.4
Ｃ組	30人	2.9

結果より、平均点が一番高いB組と一番低いC組でディベートを実施し、２番目のA組のみ一斉授業を実施することとした。

次に２つのグループの記述内容の分析方法①～②について述べる。

①　学習前後にクレジットカードのメリット・デメリットを書き出し、そのワードの数の平均を算出する。

②　学習前後でクレジットカードのメリットとデメリットの記述内容を分類し、人数とクラスに対する％を示す。

以下、ディベートを３時間行ったクラスの授業内容と一斉授業を行った３時間の学習内容を示す。

（２）実施した授業の内容

【ディベートの授業クラス】

２で紹介した生徒に適したディベートについては、対象生徒が初めてディベートという学習方法に取り組むことを想定して提案をした。そのため、５時間計画になっているが、ここでの対象生徒は３年生ということもあり、ディベートの学習にも慣れていることから、３時間計画とした。

表１　フローシート

	持つ	持たない	メモ
立論	・現金を持つ必要がない ・お金の管理がしやすい ・後払いができる →便利、高価なものを買うときに・・・ ・ポイントがたまる ・持っているとかっこいい	・加盟店でしか使えない ・紛失した時の対処が大変 ・手数料がかかることがある ・実物が見えない ・即時払いの方が安心 ・使いすぎる心配がない	
議論	・犯罪などを防止してくれるセキュリティーの高いカードを選べばいい ・事前にちゃんと調べて、セキュリティーが充実したカードを選べばいい	①「持つ」現金をたくさん持っているよりクレジットカードの方が楽 現金が盗まれるより、クレジットカードを盗まれて大金を使われる方が困るのではないか ・セキュリティーがないカードを持っている場合は？	セキュリティーが充実したカード
	・明細書が届くから自分が使用していなかったら警察に届ける	②　支払い時の「同意」とは？ピッとカードをかざすだけなのに、それが本人による支払いで「同意」となるのか？いつの時点で「同意」なのか？ ・不正に使用された時に、どのように「同意」したと認めるのか？本当にセキュリティーは守られているのか	暗証番号とかの決算時の注意点
	・本人がしっかり理解していればよい ・事前にカードが使えるかどうか確認してから使えばいい。お店にカードが使えるか書いてあるからわかるはず ・現金をいっぱい持つのではなく、少しはもっておくようにすればいい	③　カードが使用できるお店と使用できないお店がある。近所ならわかるかもしれないが、知らない場所に行って、使えないことが支払いの場所でわかったら？ ・外国に行ったときは？	
最終弁論	・現金を持たないんじゃなくて、少しはもっておいたほうがいい ・紛失したり、不正に使われないセキュリティーの高いカードをもつべき ・そもそもお金を持っていなかったら、ものを買わないべきだと思う	・店舗を把握しておけば・・・って難しい ・マークがなかったら結局買えない ・本人以外は買えない	

表２　指導計画

時間	学習活動
1	・日常生活、教科書やインターネット、新聞、雑誌、ニュース等様々の手段で情報を収集する。［個人活動］
2	・収集した情報について、裏付けられる明確な根拠や理由も含めて情報を整理する。［班活動］ ・クラスをテーマに対して肯定派２グループ、反対派２グループ、計４グループに分ける。それぞれの立場で改めて、説得力のある情報を収集し整理していく。［班活動］
3	・作戦シートを活用して、各立場の立論と相手の立場への反論事項、反駁の内容を予想し、情報を整理し、論理的に述べられるように準備をする。［班活動］
4	・２時間に分けて、１時間１セットずつディベートの討論会を行う。
5	・フローシートを活用し、話し合いの内容をフィードバックして理解を深める。

① 授業のテーマ
「クレジットカードを持つか？持たないか？」
② 授業実践過程
クレジットのリスクを理解しながらも、カードを持つことの有効性に気付けるディベート学習の具体的な授業過程は、次の通りである。

・ディベート中の一人の生徒の発言回数は２回までとする
・人を非難する発言はしない
・反論や質問は、原則１分以内とする
・作戦のためのタイムアウトは、各班２回までとする

生徒は、各自でまず、クレジットに関する情報を収集することから始めた。その際に、「三者間契約」や「クレジットのしくみ」など学習指導要領に記載されているキーワードを提示した。また、クレジットのしくみを分かりやすく説明されている動画の紹介をするなどして、各自でクレジットに関する知識を習得した。

次に、クラスを肯定派２グループ、反対派２グループ、計４グループに分かれた。そして、各自で収集した情報について、班で情報共有をした。単なる意見交換ではなく、裏付けられる明確な根拠や理由も含めて情報を整理した。その際に作戦シートを活用して、各立場の立論と相手の立場への反論事項、反駁の内容を予想し、情報を整理し、論理的に述べられるように準備をした。調べ学習や話し合いなどを積み重ね、班内で立論や反論の準備を進めた。

＜２時間目＞

２時間目の展開については表３に示した。以下、具体的に説明をする。

① 授業が始まるまでにディベートの会場設営をしておく。授業の初めにディベートの流れ、約束事などを再確認した。その後、１グループのディベート討論会を行った。ディベーター以外は、傍聴者として参加し審判をした。また、傍聴者の肯定派・否定派の中から一人ずつ書記として文書作成ソフトを活用してフローシートを作成した。

審判になっているグループは、ディベートを行っている際に、作戦タイムの時間になると自分たちの班であればどのように対応するのか、想定していない内容であれば調べ直したりして自然と班内で話し合う様子が見られた。

② 後半に、もう１グループのディベート討論会を行った。

１グループ目のディベートの様子や流れのイメージができており、スムーズに且つさらに内容を深められる活動が見られた。同じテーマで行うことによって似たディベートになることより、むしろ１グループ目の内容に付け足したりさらに調べた内容を深めたり、また違う視点から討論をするなど活発に行った。

＜３時間目＞

２グループの討論のフローシートを全員で共有し、内容をフィードバックして理解を深めた。

フィードバックをしながら改めてクレジットのしくみの確認をしたり、カードを持つことのメリットやデメリットの両面を確認したりした。

また、キャッシュレス化が進む現代、どのように見えないお金と付き合う必要があるのか、今後計画的な金銭管理の必要性などを生徒のディベートを踏まえて考えた。

【一斉授業を実施したクラス】

① 題材名
「お金との付き合い方について考える」
② 目標
ア）様々な販売方法の特徴が分かる。［知・技］
イ）即時払い、前払い、後払いの特徴を理解し、利点と問題点を理解する。［知・技］
③ 授業の展開
＜１時間目＞
購入の方法と支払いの方法について理解しよう
ｉ）自分や家族が利用をしているいろいろな販売方法（店舗販売と無店舗販売）を挙げて、それぞれの良い点と不便な点を考える。
ii）自分や家族が利用をしているいろいろな支払い方法（前払い、即時払い、後払い）の良い点と注意点を考える。
＜２時間目＞
クレジットカードのしくみを理解しよう
ｉ）特に後払いのクレジットカードに焦点化して進める。
㋐クレジットカードの申込書を実際に記入しながら、「credit」（信用）の意味を知る。
クレジットカードの申込書を記入すると、個人情報や年収等を記入する必要がある。これは、「期日までに支払いができる能力があるかどうか」を審査されることで、それが「信用」につながることを理解させた。
㋑視聴覚教材や掲示物を活用しながら、クレジットカードについて理解する。
クレジットカード協会のDVD[(2)]や地方自治体の消費生活センターが学習教材[(3)]として作成されたサイト、シミュレーションなどを活用し、クイズに答える形でワークシートを準備し、理解を深めた。まず、クレジットカードのしくみについて説明をして、後払いであることは借金をしていることを理解させた。
＜３時間目＞
計画的なお金の使い方について考えよう
㋐クレジットカードの支払い方法の種類や利息シミュレーションを行った。また、分割払いやリボルビング払いの利子の計算方法について、架空で購入をした商品の値段や分割払いの回数、リボルビング払いの場合は月々の支払金額の設定金額や架空で購入をした商品の値段などを計算式に入力するだけで、簡単に計算されるサイトで、一括で支払った場合と分割やリボルビング払いとの差を比較するなどした。
㋑多重債務の説明と原因について考えた。原因として本人の無計画な金銭感覚もよく挙げられるが、社会の急激な変化や病気・ケガ等も関係してくることなど、偏見に

ならないように様々な要因について考えた。ただ、やはり借金をしていることには変わりないこと、様々なことも考えた上で消費生活を送る必要があることについて考えを含めた。

さらに、「自分ならどうするか」という視点で最後にまとめた。

4．結果

学習前後で「クレジットカードのメリットとデメリット」について、できる限り記入するようにした。例えば、クレジットカードのメリットについて一人の生徒が「少しお金が足りない時でも買える。まとめて払える。時短」と書いた場合、ワード数は3つとカウントをする。ワード数は生徒によって個人差があるため、合計をしたワード数を質問紙に答えた生徒数で割り、一人あたりのワード平均数を比較した。その結果、ディベートを実施B組とC組の方が一斉授業を実施したA組よりメリット、デメリット共にワード数が増加した（表3）。なお、このワード数については、共同研究者も同じ作業を行い、結果のすり合わせを行った。

表3　クレジットカードのメリットとデメリットのワード数（平均値）

		学習前	学習後
メリット	A組	2.1	2.3
	B組	1.9	4.1
	C組	1.8	2.9
デメリット	A組	1.7	2.0
	B組	1.6	2.8
	C組	1.7	2.5

注）A組は、一斉授業を実施、B,C組はディベートを実施

次にクレジットカードのメリットの記述内容を学習前後で比較した（表4）。一斉授業ではほとんど授業内で理解したことに留まる内容が、ディベート学習では論争に勝つための情報として多くのことを調べ考えられる。クレジットカードを持つことのメリットとして「（精算時の」時間短縮」や「（高額の物を購入する際でも、手持ちがなくても購入ができる）現金不要」という理解に留まらず、「（使用をすることによる）ポイント付与」や「オンラインショップでの清算が簡単」というメリットも挙げられた。また、利息がつきデメリットととらえられがちな「分割払いが可能」についても、利息のつかない支払い方法があることや分割払いであっても自分で考えて支払い計画ができるかどうかに関わってくることからメリットの一つとして挙げられた。クレジットカードが発行されることによる社会的信用やそれに伴う補償などの視点からも考えられるのはディベートを実施したクラスの方であった。同様にデメリットについても比較をした（表5）。

その結果、ディベートを実施したクラスは「必要以上に使いすぎてしまう可能性がある」ことをデメリットとして挙げた生徒が減ったがディベート未実施クラスは増えた。ディベートを実施したクラスの場合、このデメリットを改善するための手立てとして、最近では自分でカードの使用状況をサイトで簡単に確認できることや使用後すぐに使用速報が届くことなどの便利な機能もあることを知り、必ずしも使いすぎにつながるとも限らないことまで調べられた結果であると予測できる。一方で、「返済時に利息がつくこともある（利息のことを気にする必要がある）」こと、「オンラインショップでの支払いは簡単だが、悪用されてしまう可能性もある」「使用可能な店舗が限られるため、過信してはいけない」ことなどクレジットカードを持つことにより便利さだけではなく注意するべき点についてはディベートを実施したクラスの方が多く記述数があった。実生活では、便利さと注意点を理解し、さらに自分の性格なども含めてより良い選択をする必要がある。

これらの結果から、一斉授業の時には情報量が多くなりすぎるため特別クローズアップして話をしないことが多い。また、話題になったとしても興味のある生徒の記憶には残るが、全体として取り上げられることも少ない。しかし、ディベートを行うことにより、メリットについてよりアピールできることを探し、逆にデメリットになる部分についてできるだけカバーをする点を考えるようになる。

表4　メリットの学習前後の記述内容を分類

		時間短縮	おつり不要	ポイント付与	現金不要	荷物にならない	分割払いが可能	かっこいい	金銭管理がしやすい	オンラインショップで便利	自分の証明	保険・補償	その他
学習前	A組	11 (28.9)	2 (5.3)	4 (10.5)	11 (28.9)	8 (21.1)	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.6)
	B組	13 (28.3)	0 (0.0)	2 (4.3)	16 (34.8)	7 (15.2)	1 (2.2)	1 (2.2)	2 (4.3)	1 (2.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (6.5)
	C組	9 (18.8)	4 (8.3)	4 (8.3)	17 (35.4)	10 (20.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (6.3)

学習後	A組	13 (24.5)	1 (1.9)	2 (3.8)	16 (30.2)	9 (17.0)	5 (9.4)	1 (1.9)	2 (3.8)	1 (1.9)	0 (0.0)	3 (5.7)	0 (0.0)
	B組	16 (30.2)	0 (0.0)	20 (37.7)	22 (41.5)	2 (3.8)	8 (15.1)	1 (1.9)	5 (9.4)	7 (13.2)	6 (11.3)	12 (22.6)	5 (9.4)
	C組	12 (22.6)	0 (0.0)	12 (22.6)	26 (49.1)	7 (13.2)	12 (22.6)	2 (3.8)	4 (7.5)	6 (11.3)	0 (0.0)	1 (1.9)	2 (3.8)

注）A組は、一斉授業を実施、B, C組はディベートを実施　上：人数　下：％

表５　デメリットの学習前後の記述内容を分類

		必要以上に使う可能性がある	支払いが後々までかかる	使用できなくなることがある	利子がつくことがある	通帳の残金を気にする必要がある	落とした時のリスクが高い	コンパクトなのでなくしやすい	悪用されることがある	契約の手間がかかる	使用時に手間がかかる	使用時できる店舗が限定される
学習前	A組	9 (39.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (8.7)	5 (21.7)	2 (8.7)	3 (13.0)	1 (4.3)	0 (0.0)	1 (4.3)
	B組	10 (29.4)	6 (17.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.9)	1 (2.9)	4 (11.8)	6 (17.6)	2 (5.9)	2 (5.9)	1 (2.9)
	C組	12 (36.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.0)	2 (6.1)	6 (18.2)	2 (6.1)	6 (18.2)	2 (6.1)	0 (0.0)	2 (6.1)
学習後	A組	20 (43.5)	0 (0.0)	1 (2.2)	7 (15.2)	0 (0.0)	4 (8.7)	2 (4.3)	5 (10.9)	5 (10.9)	0 (0.0)	2 (4.3)
	B組	14 (22.6)	5 (8.1)	3 (4.8)	8 (12.9)	0 (0.0)	6 (9.7)	1 (1.6)	20 (32.3)	4 (6.5)	0 (0.0)	1 (1.6)
	C組	18 (26.9)	1 (1.5)	1 (1.5)	14 (20.9)	0 (0.0)	8 (11.9)	1 (1.5)	17 (25.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (10.9)

注）A組は、一斉授業を実施、B, C組はディベートを実施　上：人数　下：％

５．まとめ

家庭科におけるディベート学習について、指導計画、ディベートの展開を確立するまでの過程や効果について報告してきた。最初は、「ミニディベート」という学習方法に取り組み、その時の生徒の生き生きと発言する姿が、よりよいディベート学習の指導計画を確立させていこうと思ったきっかけであった。そして、自分たちが考えたことに対して、意見や疑問などを言われると、生徒は思わず反論したり打開策を言いたくなったりする雰囲気と活発化する学習活動に、さらにクラス全員が参加できるような学習活動にしたいと考えた。

例えば、クレジットカードの場合、生徒は実生活で活用していない。しかし今は、「よく分からないから持たない」「（持つかどうか）分からない」と言う生徒が多いが、キャッシュレス化が進み、将来、クレジットカードを含めて見えないお金と付き合うことになるはずである。そのため、クレジットカードのしくみやメリット、デメリットについて学ぶことは興味関心が高く、難しい内容であっても新しいことを学ぶことに意欲的である。ただ、身に付ける知識量や学びに向かう姿勢を比較した際には、ディベート学習の方が効果的である。ディベートは調べて知識を得るだけではなく、活用をする。また活用の方法として、デメリットの改善策を考えて発表をするため、「どのように上手にお金とつきあう必要があるのか」と考えられるようになる。つまり、実生活ではキャッシュレスで注意点に気を付けながら生活をしていることを、ディベートの中でより現実的に考えることで実生活に密着した学習内容となり主体的に学び考えられるようになる。この結果については、堀内・土屋（2012）も、ディベートという学習方法は、その前時のグループでの話し合いの時間を含め、論題の関する意見を様々な角度から顕在化させるために有効であるということを述べており、

同じような成果を得ることができたと考える。さらに、ディベート学習の良さは、実生活に繋げながら考えられつつも客観視できることである。「自分の考え」となると自信がなくても、意図的に分けた班であれば発表もしやすくなり、協力性も必要となる。最終的に勝敗をつけることで、さらに試行錯誤を重ねる。また、日常生活において、何かを意思決定する際に自然と行われる思考活動を取り入れ、より実践的にすることで、生徒は非常に主体的に取り組む様子がみられた。一方、３年生の授業数の問題と関係するが、ディベートの時間からフィードバックまでの時間が大きくあいてしまったことで、生徒の学習意欲が低下してしまったことが今回の課題であった。そのためにも、ディベートのテーマや対象学年、生徒のディベートの経験などによって方法等を変える必要もある。これからさらに、年々ブラッシュアップしていく中で深められるようにしたい。

注）

(1)「相手の意見や批判に対して論じ返すこと」反駁は、反論の上にしっかりとした理論や根拠などが必要となる。

(2) DVD「クレジット博士と学ぶ　クレジット入門」. 一般社団法人．日本クレジット協会．クレジット教育センター．

(3)「もしも未来が見えたなら～いつかクレジットカードを使う日に～」. 東京都消費生活総合センター．

【引用文献】

荒井紀子．(2020)．探求的で深い学びを実現するカリキュラム・デザイン，SDGsと家庭科.東京：教育図書.

分校淑子．上野顕子．(2001)．生徒主体のジェンダー・家族・保育の授業研究－オンラインディベートと教室ディベートを組み合わせた授業展開－．日本家庭科教育学会誌．44.3, 261-271.

長谷川英子．(2007)．日本家庭科教育学会誌．50(1), 33-35.

堀内かおる・土屋善和．(2012)．消費生活のグローバル化を問う高等学校の授業内談話分析－ジーンズを教材として－．日本家政学会誌．63. 10, 659-41.

伊深祥子．(2018)．教育改革の潮流と家庭科教育４．学びを深める家庭科教育．日本家庭科教育学会誌．61. 3, 172-175.

香川実恵子．(2001)．日本家庭科教育学会誌．43(3), 295-298.

神山久美・堀内かおる．(2010)．家庭科における消費者教育の実践と評価．日本家庭科教育学会誌．53(1), 32-39.

牧野カツコ．(1996)．人間と家族を学ぶ家庭科ワークブック．東京：国土社

文部科学省．(2018)．小学校学習指導要領（平成29年告示）解説．東京：東洋館出版

文部科学省．(2018)．中学校学習指導要領（平成29年告示）解説技術・家庭編．(pp3). 東京：開隆堂出版.

【参考文献】

北岡俊明．(1995)．ディベート論争の技術．東京：明日香出版社.

松本道弘．(2010)．１時間でわかる　図解　ディベート入門．東京：中経出版.

西部直樹．(1998)．はじめてのディベート．東京：あさ出版.

杉浦正和．(1996)．生徒が変わる　ディベート術！．東京：厚徳社.

鈴木健・大井恭子・竹前文夫．(2006)．クリティカル・シンキングと教育―日本の教育を再構築する―．京都：世界思想社.